

令和6年度 印西市民アカデミーだより

第12号

講座18：歴史散策「東国三社詣」

東国三社とは、鹿島神宮（茨城県）、香取神宮（千葉県）、息栖神社（茨城県）の三つの神社を指し、国譲り神話に由来することで、昔から信仰を集めていた関東有数のパワースポットです。江戸時代になると、江戸の文人墨客、庶民の東国三社（鹿島神宮、香取神宮、息栖神社）を巡拝する旅が盛んになり、日本橋小網町を小舟で出発し、小名木川・新川・江戸川を経由して行徳河岸に至り、そこから徒歩で木下河岸に向かい、木下茶船に乗り、利根川を下って三社に向かいました。記録には、木下河岸を出る船数は、安政年間（1772～）には、年間約4,400～4,500隻にも達していて、往時の木下河岸の繁栄がうかがえます。今回は、船に代わりバスで三社を巡り、その魅力を探る旅に出ました。

10月31日（木）、印西市役所を出発し、利根川沿いの道を約1時間走り香取神宮に到着。朱色の二の鳥居から入り、大きな石灯籠が並ぶ坂道を登っていき、総門・楼門をめぐり本殿へ。本殿は、檜皮葺、黒漆を基調とした色合いに極彩色で彩りを加え、御神意の大きさを感じさせます。次に楼門より旧参道を西へ進み、地震を起こす大鯰を抑えるため地中深くまで差し込んでいるとされる霊石「要石」に立ち寄り、さらに経津主大神の荒魂を祀る「奥宮」を参拝して終了。鹿島神宮に向かう。

鹿島神宮の大鳥居から入り、日本三大楼門の一つに数えられる楼門をめぐり、本宮、摂社の高房社を参拝。本殿の檜皮葺の屋根の美しさが目を引きまします。参拝後、鬱蒼とした巨木に覆われ荘厳な雰囲気醸し出している奥参道を歩み奥宮に向かう。途中、「さざれ石」と「鹿園」に立ち寄る。奥宮の前の旧坂を下り、古くからの禊の場である御手洗池に向かう。御手洗池のほとりに、樹齢600年の杉の巨木の切り株が残っている。これは、東日本大震災で倒壊した御影石製の鳥居に替わり、境内に自生する杉の巨木を用いた同寸法の大鳥居を再建したおりに使われた巨木の1本である。急坂を上り、地震を起こす大鯰の頭を押さえている鎮石ともいわれる「要石」を見学し、昼食後、息栖神社に向かう。

息栖神社では、一の鳥居の両脇にある二つの四角い井戸「忍潮井」を見学。伊勢の「明星井」、山城の「直井」と並び「日本三霊泉」の一つ。それぞれの井戸の中を覗くとうっすらと瓶が見え、銚子の形をしているものを「男甕」、やや小ぶりの土器の形をしているものを「女甕」と呼んでいます。

天候にも恵まれ、さわやかな秋空の下、古代ロマンを感じながらの楽しい「現代版：東国三社巡り」となりました。



日本書紀と香取大神



鹿島神宮の社殿は北向き



日本三霊泉：「息栖神社の忍潮井」